

つれづれ けんちく 草

同級生に誘われて、高校時代の恩師が開催されている「論語を読む会」に時々参加しています。「論語」なんて高校の時の授業以来でしょうか。懐かしい気持ちで参加したのですが、六十（ちよっと手前）の手習い、新たな発見もあります。その中から少しご紹介したいと思います。

「子の曰く、由よ、汝にこれを知ることをを誨おしえんか。これを知るをこれを知ると為し、知らざるを知らずと為せ。是れ知るなり。」

私は大きな勘違いをしていました。ずっと、自分には知らないことがまだまだあるということを知りなさい、という意味かと思っていたのですが、確かにきちんと読むとニュアンスが違います。「知ったことは知ったこととし、知らないことは知らないこととする。それが知ることだ。」というのが和訳となります。ここで少し疑問が残ります。「知らないこと」なんて、そもそも知らないんだから把握できないじゃないか。「知らないこと」の全てに「知らない」というレッテルを貼るには、「知らないこと」を全部「知る」ことが必要になってしまわないか。しかし以下の解釈を聞くとこの疑問も見当違いとわかりました。

論語は孔子のおっしゃったことを弟子が書き留めたものなので、さまざまな解釈があります。その一つの解釈では以下になります。「智者とは当然知るべきことを知ろうと務め、知って益なきことは知ろうとしないものをいうのであり、天下の事を

尽く知るものをいうのではない。」さらにその大意として書かれているなかに、「天下のことは限りなく、一人の智には限りがある。まして事は多端であり、知ることのできるものがあり、できないものもある。知りえないものをあえて知ろうとするのは穿鑿せんさく的な知の過ちであり、知りうるものでも、これをすべて知ろうとするのは、濫用的な知の過ちである。」とあるのです（子安宣邦『仁齋論語 上下 論語古義』現代語訳と評釈 ぺりかん社 2017）。

「知の過ち」とまで記述されていることに驚きましたが、つまり、「知らなくてもいいことをわかまえよ。」という意味だということでしょうか。・・・これは「知るべきこと」だったのでしたが、知りませんでした。

「子の曰く、君子は周して比せず、小人は比して周せず。」

これも興味深い言葉でした。和訳は「君子はひろく親しんで一部の人におもねることとはないが、小人は一部でおもねりあつてひろく親しまない。」となります。特定の少数人しか仲良くせず、その範囲の人の便宜のみを図るのはよくない、という意味なのだそう。・・・たしかにそうかもしれないませんが、何も小人（つまらない人、徳のない人、の意）とまで言わなくても。

しかし、ふと、ある住居学の先生がおっしゃったことを思い出しました。「核家族が増えて、家族人数が減り、家族の関係が濃すぎていろいろな問題も起こる。家族の関係を薄めることも必要で、コレクティブ

ハウスやシェアハウスは、家族以外の居住者との共棲によって、家族を薄める効果もある。」偶然、私の元上司も、最近の講演内容に「人間関係は薄く広い方がよいのだ。」と含めているそうです。人間関係を深めることも重要だけれど、濃すぎる関係も煮詰まらない程度に薄めることが必要なのかもしれません。

古くて新しい「論語」に触れて、リフレッシュされたような気がします。

かも・みどり

京都大学大学院
工学研究科建築学専攻博士課程修了
博士(工学)・一級建築士
(一社)京都府建築士会 代議員
大阪ガス株(エネルギー)文化研究所 主席研究員
大阪商業大学 非常勤講師